

中・上級の語彙指導における和語動詞の重要性

国際大学 田丸淑子

1 はじめに

日本語を教育や研究の手段としてではなく、将来（または現在）の職業上の必要から学習している者の多くは、到達目標のひとつに、日本の新聞や雑誌の経済・金融関係の記事を読みこなすことをあげる。また、経済記事を読むだけでなく、外国語で得た経済・金融の情報を日本語を使ってビジネスの場で活用したい、という希望も多い。しかし、このような学習者に必要とされるのは、単に記事や文書の読解や日常会話の能力だけではない。駒井(1990)が指摘するように、彼等には複雑な議論や説明のための、まとまった文章を作る能力が必要となる。筆者が担当する国際大学大学院の日本語学習者もこのような学生達である。そこで、筆者は新聞記事やテレビ・ラジオのニュースを素材として用い、学習者に経済・金融に関する情報を集める力と、その内容にふさわしい語彙や表現を用いて、発表・議論する力をつけることを目標として授業を行なってきた。

これらの記事の中で、専門的、抽象的な概念を表すのは主として漢語語彙である。最近の日常会話中心のシラバスで教育を受けてきた学習者にとって、これら漢字語彙がどれだけ使いこなせるかが、目標達成のカギをにぎるのではないかと考え、漢字語彙の学習に重点をおいた授業をおこなった。ところが、実際に授業を進めてみると、筆者が予想していたこととはかなり異なる現実に遭遇した（田丸 1995、1998）。それは、

- ① 専門用語と思われる漢字語彙に重点をおいて授業を進めてみたが、実際の経済記事やニュースには、経済の分野を感じさせない、より一般的な語彙が骨組みとして多数用いられており、学習者にとっては専門用語よりむしろそちらの学習が難しかった。（例：合意、対応、還元、経済構造を転換する、市場原理を導入する、課税の対象となる、経営の健全性を維持する、公的資金注入を余儀なくされる、需要をまかないきれない）
- ② 経済の専門用語は、主に欧米から持ち込まれた概念の訳語がほとんどで、意味領域が限定されていて英語と一対一の対訳が可能である。そのため、専門知識を持ち、英語の理解できる学習者にとってはその用語の意味する概念の理解はさほど問題ない。（例：流動性、自己資本比率、優先株）
- ③ 「専門記事＝漢字語彙の世界」という予想に反して、かなりの数の和語動詞が用いられており、それが、特に文章を作る場合に学習者にとって難しかった。つまり、この和語動詞が使いこなせないと、専門的な漢語語彙は出てきても、それらを文としてまとめられない、あるいはまとめられても、稚拙な短文の連なりしかできないということになる。

このような経験をして、経済記事が実際にどのように書かれているのか、語彙という視点から観察してみようと思立った。新聞や雑誌の語彙使用については、既に国立国語研究所から大規模な報告が出ている（1962、1970）。しかし、それは経済の分野に限定されたものではない。またそれらは、個別の語彙の使用頻度という点では参考になるが、文の中での語彙の使われ方はそこからは探れない。そこで先ず手始めに、新聞の経済記事に用いられる動詞、特に和語動詞に焦点を当てて調べてみることにした。ここでは、日本経済新聞の一面記事から4つ、社説から3つ、経済教室から3つと三分野の計10の記事についての観察を報告する。一面記事は出来事の速報、社説は意見、「経済教室」はあるトピックについて学者や専門家が執筆する比較的長めの解説と、それぞれ記事の長さや性格が少しずつ異なる。

2-1 和語動詞がどのくらい使われているのか

「する」と「なる」、は「～とする」「～となる」「～になる」等の形で頻用されることが、国立国語研究所の調査で報告されているので、除外した。また補助動詞としても使用されるので「ある」、「いる」、「くる」、「いく」も除外した。それ以外の動詞を「漢語＋する」「和語動詞」「混種語（音読み漢字一字＋する：例：対する）」に分けて、それぞれの出現比率を見た。三つの分野の平均値を下表に示す。（個々の記事についての数字は、田丸(1999)を参照されたい。）

	延べ数		異なり数	
	漢語	和語	漢語	和語
一面記事	43.6%	47.8%	41.9%	50.6%
社説	31.9%	64.1	30.3	65.3
経済教室	38.7	58.8	35.8	61.0

これだけの資料から一般化することは難しいが、この結果を見る限り、

- ① 平均では、すべての分野で和語の比率が高い。個々の記事では、異なり語数はすべての記事で和語の比率が高いが、延べ語数は一面記事二つと経済教室の一つで「漢語＋する」の比率が高かった。それは、ひとつの記事の中で、特定の語（提示する、予想する、導入する等）が多用されたためではないかと考えられる。
- ② 一面記事では「漢語＋する」と和語動詞出現の差はあまり大きくないが、社説や経済教室では差が大きくなっていることが目立つ。これは、記事の長さによるのか、社説や経済教室などの記事の性格によるものなのか、これだけの資料からは判断できない。しかし、追跡調査として、同一トピック（第一勧銀、富士、興銀の業務統合）で99年8月20日付けの日本経済と毎日両紙の一面、社説、背景解説記事を比較してみたところ、一面記事と社説では大きな差が見られたので、これは記事の性格の違いが関係していると考えられよう。
- ③ 50～60%が多いか少ないかは、他の分野での使用状況とも比べた上でなければ論じられない。しかし、従来、「日常的、話し言葉的、卑俗的」とされている和語であるが（武部 1989、玉村 1989）、実際には、動詞に限って言えば、専門的な経済・金融の記事で多用されていることがわかった。

2-2 どんな和語動詞が使われるのか

日本経済新聞の10の記事に出現した和語動詞（延べ数 393 語、異なり数 198 語）について、出現回数の多い語は以下の通りである。（「する」、「なる」、「ある」、「いる」、「来る」、「行く」は除く）

10回以上： 始める(11)

9～6回： 考える(9)、進む(9)、進める(9)、持つ(7)、迫る(7)、見る(6)、生まれる(6)、伴う(6)

5～3回： 示す(5)、言う(5)、急ぐ(5)、増える(5)、分ける(5)、あわせる(4)、かえる(4)、取る(4)、広がる(4)、求める(4)、促がす(4)、比べる(4)、超える(4)、支える(4)、目指す(4)、及ぶ(3)、加える(3)、備える(3)、つける(3)、整える(3)、流れる(3)、除く(3)、望む(3)、見える(3)、向ける(3)、与える(3)、選ぶ(3)、陥る(3)、知る(3)、耐える(3)、広げる、認める(3)、基づく(3)

次に、2つ以上の記事に使われた語をひろってみる。

6つの記事： 考える

5つの記事： 進む、示す、持つ

4つの記事： あわせる、いう、代える、進める、取る、始める、広がる、見る、求める

3つの記事： 急ぐ、促す**、生まれる、及ぶ*、限る、比べる、加える、超える、支える*、迫る*、備える*、つける、整える、伴う*、流れる、除く*、望む、増える、見える、向ける、目指す*

2つの記事：あげる、与える、受ける、失う、移す、選ぶ、得る、おくれる、陥る、重ねる、
 決める、溯る、下がる、知る、耐える、高まる、高める、続く、出る、取り組む、
 並ぶ、のぼる、入る、始まる、果たす、広げる、増す、まとめる、認める、向かう、
 めぐる、基づく、揺らぐ、分ける
 (無印は「日本語教育のための基本語彙調査」(1984)で2000語に、*は6000語に含まれる語で、**は基本語以外の語)

これらを見ると、

- ① 和語動詞は、日常的会話にも用いられるものから、あらたまった調子の文章語まで広汎にわたる。前者の例としては、思う、考える、進む、言う、受ける、取る、比べる、等があり、後者のものとしては、与える、改める、歩む、営む、失う、謳う、促がす、陥る、及ぼす、加える、異なる、示す、整える、伴う、担う、述べる、図る、率いる、経る、めぐる、などがあげられる。この例をみても、和語が「日常的、卑俗的」とひとくくりにはできないことがわかる。
- ② 以上の和語動詞の中には、経済・金融の分野性を感じさせる語は一つもない。参考のために、農学系学術雑誌の語彙を分析した村岡他(1995、1997)の報告と比べてみた。村岡他の報告中、出現頻度10回以上の和語動詞65では、「湿る」だけがわずかに農学を感じさせる語で、それ以外は経済・金融そしておそらくどの分野の専門記事にも使用しうる語である。ここから、専門記事や文献に用いられる和語動詞は、分野には殆ど制約されていないといえよう。
- ③ さらに、経済記事の「漢語+する」の動詞も調べてみたところ、異なり語数156語の中で、経済・金融の分野性をあらわしていると思われる語は、「計上する」「課税する」「算出する」「算定する」「出資する」「節約する」「投資する」「買収する」「返済する」「民営化する」「融資する」「解約する」の12語であった。村岡他(1997)の場合でも、農学の分野性をあらわす「漢語+する」型の動詞は102語中22語と和語動詞の場合よりは多いが、どちらにしても、動詞は専門性、分野性を担うものは多くないことがわかった。
- ④ 専門文書の動詞について、加納(1990)は、「専門書に共通するとみなされる動詞群を「中間動詞」と呼び、ある特定分野にしか使用されないような特殊の動詞のみを「専門動詞」と呼んで区別する」(p.43)と提案している。村岡他(1997)は農学系論文に用いられる動詞は、この「中間動詞」に相当するものだとしている(p.65)が、上述のように、分野性が希薄であることは、経済記事においても同様である。従って、どの分野であっても、専門文書や記事では、専門概念を担うのは主として漢語または外来語の名詞であって、それらを「中間動詞」が受けて文を作り上げる。専門概念を表す漢語名詞の中で動作性を持つものは、「漢語+する」の形を取る可能性があり、それ等が加納の言う「専門動詞」となる、と言えるのではないか。
- ⑤ 上記の「中間動詞」を構成するものは、まず、和語動詞。そして「漢語+する」の形としては、国立国語研究所の新聞の語彙調査でサ変動詞として使われた名詞の中で上位のもの(例：発表、通知、注目、実施、参加、成功、優遇、決定、強化、主張、出席、紹介、要求、期待、利用、実現、反対、強調、展開、発見、等)が、その主たるものではないか。

2-3 和語動詞はどのように使われているのか

2-3-1 分類

和語動詞の用いられ方は、以下のように分類できるだろう。

- ① 語の意味がはっきりしていて、名詞とのつながりで自由度が高いもの。ここには出現頻度の高い和語動詞が含まれる。例：始める、進める、比べる、認める、求める、急ぐ、等。
- ② 断定的表現を避けるために、文末に用いられるもの。例：見られる、言える、考える、等。
- ③ 専門記事や文書に特徴的な語で、対応する漢語がほとんど用いられないもの。限られた語が高頻度で用いられる。例：含む、伴う、加える、支える、除く、巡る、基づく、応える。なお、こ

の類には、和語とは区別した混種語（音読み漢字一字＋する／ずる）が含まれる。例：対する、属する、関する、要する、達する、応じる、通じる、報じる、等。

- ④ 新聞記事には多様されている慣用句的な表現の一部として用いられる語。例：水をあける、歩調を合わせる、拍車をかける、頭を抱える、避けて通れない、薄日がさす、水をさす、あとを絶たない、一途をたどる、弾みがつく、波に乗る、複雑多岐にわたる、裏目に出る、歯止めをかける。
- ⑤ 専門・抽象概念をあらわす名詞と連語の関係にある語：つまり、ある概念をあらわす漢語（または外来語）を使うと、その受けとめ役としてこれらの和語動詞が付随して出現するということである。例：影響を及ぼす、深刻に受け止める、合意を得る、構想を打ち出す、信用を落とす、課題を抱える、困難を抱える、圧力をかける、方向を探る、過半数を占める、命令を出す、改革を迫る、発展に努める、改革に取り組む、技術を取り入れる、均衡をとる、責任を担う、勢力を伸ばす、軌道に乗る、発展を図る、役割を果たす、協定を結ぶ、イニシアティブをとる、対応を求める、議論を重ねる、批判にさらされる、念頭におく、条件をつける、コストがかかる、印象を与える。

以上の和語の使われ方の中では、⑤の連語としての使用が目立った。

2-3-2 和語動詞を選ぶか、「漢語＋する」を選ぶか

和語動詞と「漢語＋する」のどちらを選択するかは、個人差、文体もからんで、簡単には論じられないだろう。しかし、これだけの限られた資料の中から次のような興味深い点を見つけた。

- ① 「和語、漢語のどちらを選ぶか」ということは「名詞＋を」に後続する動詞を和語動詞にするか、それともそれに意味的に対応する「漢語＋する」にするか（例：事件を調べる／調査する、事業を拡げる／拡大する）の選択だと考えていたが、観察してみると実際にはそれ以外に、次のような選択肢があることに気づいた。それは、中国と交渉する／中国との交渉を進める、アジア経済に影響する／アジア経済に影響を及ぼす、インフレを懸念する／インフレへの懸念を高める、民営化について議論する／民営化についての議論を進める、投資を管理する／投資の管理を行なう、方針を修正する／方針に修正を加える、等である。これらの例が示しているのは、「漢語名詞＋する」対「漢語名詞＋を＋する以外の和語動詞」という対立である。意味的には「米国と交渉する」も「米国との交渉を進める」も殆ど変わらない。強いて言えば、「交渉を進める」の方がよりこなれた表現とも言えるかもしれない。実際、新聞記事や文献にはこの類の表現が目立つ。追跡調査として行なった三大銀行業務統合の記事では、一面記事の特にリード部分では「漢語＋する」を多用して重文で繋げている形が見られるのに対し（例：子会社を合併させ、本体のリストラを実施する）、社説では、「漢語名詞＋を＋する以外の和語動詞」の形が目立つ。
- ② さらに、「漢語名詞＋を＋する以外の和語動詞」を用いるのは単に語感だけの問題ではなさそうだ。漢語部分を名詞として保てば、その前に大きな修飾部分をもってくるのが可能になる。そのためこの形が選ばれるのではないか。一般に、一面リード部分以外の経済記事や文献には連体修飾で名詞句を拡大する傾向があるようだ。拡大された名詞句の核となる被修飾名詞は、当然、和語動詞とも「漢語＋する」とも結びつく可能性がある。それが漢語名詞の場合、漢語・和語のバランスをとる意味と、前述の連語の関係で和語動詞が用いられる傾向があるのではないかと期待して調べてみたところ次のような例が見つかった。

「国内の設備投資の削減（を促す）」「経営への参画ができる優先株の取得（を促す）」「比較可能な基準の確立（が望まれる）」「リスク管理の構築が遅れる銀行の淘汰（が進む）」

しかし例が少なすぎるので、これだけで、実際にこのような傾向があるとは言えない。

以上の観察を通して、文から切り離した個々の語彙を扱うだけでは、その特徴を見ることはできないということがわかった。語彙は文の中で、他の構成要素とのつながりを調べた上で論じる必要がある。

る。特に和語動詞は連語として名詞との結びつきを把握した上で論ずることが不可欠である。今まで行われてきている和語の造語力や専門語としての和語の位置に関する報告は、範囲を一語内に限定しているが、範囲を広げて助詞を含めた複数語のかたまりとしてとり上げて分析してみると、和語に関してより多くの情報を得ることができるのではないだろうか。また、実際に語彙がどのように使用されているのか、もっと情報を得るために、単なる語彙調査ではなく、大規模なデータベースの構築がのぞまれる。データベースができれば、今まであまり着手されていない語彙使用の質的な分析への手がかりも得られるだろう。

3 3 日本語教育への提案

日本語教育では、語彙は伝統的に文型・表現ほど重視されずに学習者個人に任されることが多い。そのため、語彙は提示されてもなかなか定着せず、使用語彙とし学習者が活用できるまでには至らない。この状況を改善するためには、系統だった語彙指導が必要である。より効果的で説得力のある語彙指導の方法を作り上げるためには、先にも述べたが、現実の文章の中で語彙がどのように連携しながら機能しているのかを観察することが必要である。

指導の面でも、語彙は連語など、他の語彙との関連を強調して指導すべきである。そして和語動詞を軽視しないこと。授業では漢字の学習ということもあって、漢字語彙が強調されがちである。その結果、名詞は適切なものが選べても、それを受ける動詞が使えずに文が締めくくれない、という学習者が多い。特に漢字系学習者は上級になればなるほど漢字語彙に依存するようになり、読解はなんとかこなす。しかし説明や議論のために専門的な内容の文を作るとなると、高度に専門的な漢語を連続して長い名詞句を作るが、それをしっかり受け止める動詞が使えず、文として完成できない。このような事態にならないためにも、名詞と動詞の繋がりを強調しなければならない。特に、意味が広くあいまいな和語動詞にはその必要がある。

最後に、より体系的な語彙指導を考える際に考慮にいれるべきこととして、以下の三点をあげたい。

- ① 第二言語習得研究の分野での実証的な語彙習得研究の成果から学べることは何か。
- ② 特に英国を中心とした英語教育の分野で試みが進んでいる、連語に焦点を当てた *Lexical syllabus* からどんなヒントを得ることができるか。
- ③ インターネット上で容易にアクセスできるオンラインのグロサリー機能を、学習者にどのように使わせたら効果的なのか。

参考文献

- 加納 千恵子 (1990) 「専門書を読むための読解指導について」『筑波大学留学生教育センター日本語教育論集』 6 : 35-53.
- 駒井 明 (1990) 「上級の日本語教育」『日本語教育』 71 : 1-15.
- 村岡 貴子他 (1995) 「農学系学術雑誌の語彙調査 - 専門分野別日本語教育の観点から -」『日本語教育』 85 : 80-89.
- (1997) 「農学系 8 学術雑誌における日本語論文の語彙調査」『日本語教育』 95 : 61-72.
- 武部 良明 (1989) 「ことばの言い換えにおける和語と漢語」『日本語学』 8 (10) : 21-27 明治書院.
- 玉村 文郎 (1989) 「和語の位置」『日本語学』 8 (10) : 4-13 明治書院.
- 田丸 淑子 (1995) 「非漢字系学習者に対する中・上級の語彙指導」 *Working Papers* 6 : 102-110. 国際大学.
- (1998) 「語彙に焦点をあてた授業 - 非漢字系中級中・後期日本語学習者の場合」 *Working Papers* 9 : 78-87. 国際大学.

(1999)「専門用語と和語動詞からみた経済記事の語彙」 *Working Papers* 10 : 27-38.

国際大学.

国立国語研究所 (1962)『現代雑誌九十種の用語用字 (I) 総記および語彙表』(国立国語研究所報告 21) 秀英出版.

国立国語研究所 (1970)『電子計算機による新聞の語彙調査 (II)』(国立国語研究所報告 38) 秀英出版.

国立国語研究所 (1984)『日本語教育のための基本語彙調査』(国立国語研究所報告 78) 秀英出版.